

金沢学院大学・金沢学院短期大学

二〇二四(令和六)年度 入学者選抜試験問題

一般選抜Ⅰ期 〔三日目〕

二〇二四年二月二日(金)実施

国語

Ⅰ 注意事項

解答用紙の解答科目欄に「国語」と記入・マークしてから解答してください。

問題は1ページから21ページまであります。

第3問、第4問は受験する学科・専攻によって解答する設問が異なりますので、注意してください。

問題は持ち帰ってもよいですが、コピーして配布・使用することは法律で禁じられています。

Ⅱ 解答上の注意

解答用紙は、マーク式解答用紙と記述式解答用紙の2種類があります。

マーク式の問題で、「解答はマーク式解答用紙 10」と表示のある問いに対して④と解答する場合は、下記の

例のようにマークしてください。記述式の問題には「解答は記述式解答用紙」と表示がありますので、記述式の

解答用紙に記入してください。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ③ ● ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

問題は次のページからです。

第1問 次の文章を読んで、後の問い(問1～7)に答えよ。

十代に習ったことは忘れない。年を取ると、この事実がいよいよ重みを増してくる。(a)、稽古事は六歳で始めるといった伝統の意味にあらためて気づくのである。なぜ若いころに習ったことは忘れないのか。全身で習うからである。身体で覚えるからだ。(b)、理屈で納得するのではなく、身体で納得するからだ。

知識とは頭脳の①リョウブンである。現代人はそう思い込んでいる。だが、知識には、身につけなければならないものもあり、たいていはそのほうがはるかに重要なのだ。たとえば言葉がそうである。文明の基盤、文化の基盤である言葉がそうなのだ。理屈で言葉を習得した人間はいない。全身で習ったのである。身体で覚えたのだ。だからこそ、表情や仕草も同時に身についたのである。

母国語だけではない。外国語にしてもそうだ。理屈で習得しようとしても限界がある。それこそ、理屈では分かっている、どうしても身につかないということになってしまう。言葉もまた身体の上に浮かんでいるという単純な事実を忘れていたのである。ピアノやヴァイオリンを習うのと同じである。

(c)、野球やサッカーを習うのと同じなのだ。言葉の学習においても、リズムや呼吸を②エトクすることが、そしてそのために繰り返し練習することが、決定的に重要なのである。

音楽やスポーツにおいては誰もが練習の重要性を強調するにもかかわらず、(a) こと言葉に関しては強調しない。国語教育においても、外国語教育においても、誰も強調しないのである。これは、じつに不思議なことだ。

中学生のための教科書を何冊か読みながら、そういうことを考えてしまった。はじめは編纂委員さんの教育的な配慮にずいぶん感心していたのである。教材として選ばれた文章が、ほとんどみな最近発表されたものばかりであること、すなわちいわゆる現代文であることにいささか戸惑いを覚えはしたものの、はじめはそれが必ずしも悪いとは思わなかった。自分たちが生きている時代を知る意味では、好ましいとさえ思った。

(d)、教材の末尾に付された「学習の手引き」のほとんどすべてが、筆者の考えを読み取ったり、主人公の考え方や生き方について考えるといったものであること、その繰り返しであることに気づき、「学習の手引き」を明示していない教科書にしてもほぼ同じことを意図していることを知るにいたって、感心は困惑に変わり、困惑はやがて憤りに変わってしまった。教科書編纂者は、文学なら文学というものを決定的に誤解し、その誤解を教師に押しつけ、さらに生徒にまで押しつけているのではないか。

手にした教科書はすべて文部省検定済と明記されている。そのせいと言うべきだろう、みな

A

である。とすれば、怒りは、教科書編纂者に向け

られる以上に、文部省に向けられるべきだろう。彼らもまた何かを決定的に誤解しているのである。そしてこの誤解が、独創性もなければ想像力もない、他人に対する思いやりもなければ、集団を組織する能力もない若い日本人を続々と生み出しているのである。

逆説である。教科書には、独創的に考える力を身につけようとか、想像力をはばたかせようといった言葉が溢れている。そしてそれに見合う近頃の文章が、文学者だけではない、自然科学者や社会科学者の著作から採用されている。にもかかわらず、生み出されるのはその正反対の生徒たちなのだ。極論すればそういうことになるが、この逆説はほぼ間違いなく、教室という場所がまったく誤解されているところから来ている。

教室というのは公の空間なのだ。晴れの場と言ってもいい。それは個人の勉強部屋とはまったく違う空間、社会的空間なのである。誤解を恐れずに言ってしまうが、本音のための場所ではなく、建前のための場所なのだ。それは、呻くように本音を滲みださせる近代の文学空間の、それこそ正反対に位置する場所なのである。

そんな場所で、いったい誰が正直に、筆者の考えを読み取ったり、主人公の考え方や生き方について考えたりするだろうか。かりに読み取ったり、考えたりしても、誰がそれを公衆の面前でそのまま語ったりするだろうか。無理強いすれば、見せかけの正直さ、見せかけの素直さを習得するだけである。まったく、子供を舐めるのもいい加減にしろと言いたい。

誰もが体験することだと思うが、教師に問われて答えるとき、生徒がまず考えるのは、教師がどのような答えを望んでいるかであって、正しい答えなどではない。数学はいざ知らず、国語にいたってははつきりとそうである。また、それでいいのだ。それこそが社会性ということなのだから。教科書、とりわけ国語教科書が考えなければならぬのは、教室という場所のこのような性質ではないか。

工藤直子、今江祥智、谷川俊太郎、別役実、立原えりか、川崎洋、川西蘭、俵万智、辻仁成、長田弘、立松和平、三木卓、田村隆一、椎名誠、等々。その詩や文章が中学教科書の多くに採用されている詩人や作家である。いずれも、それぞれに味のあるいい詩や文章であり、編纂者の意図も分かる。だが、はたしてこれらの詩人や作家のすべてが、教室という公の場所でその文章が^③ロウドクされ論議されることを喜ぶだろうかといえ、疑問だ。個人的な空間でひっそりと読まれることを望んでいるように思えるものが多い。そのほうが数倍も感動を与えるように思える。彼らもまた、多かれ少なかれ、近代の文学空間のなかから生まれてきた詩人や作家であるからだ。

実際、生徒が教科書に掲載された詩人や作家を尊敬するかといえば、大方はそうではないのである。教室という公の場所で論議される筆者の考え方や、主人公の生き方といったものが、十全であるはずがない。また、そういった要約からどうしても洩れてしまうものがあるからこそ、それはすぐれた文学と見なされているのだ。筆者の考え方を要約しろと言われた生徒が、どうしようもないもどかしさを感じるのは自然で、そのもどかしさが逆に筆者へのうとま

しさへと発展するのも自明である。教科書に掲載されるのは④メイワクだと考える詩人や作家が出てきても少しもおかしくはない。

要は、国語教科書は果たして物を考えるその考え方を教える手段なのかどうかということである。編纂者たちは明らかにそう考えている。教材となった文章の考え方を正確に掴み、その考え方の道筋をたどることを教えることが、教科書の使命であると考えている。だが、現状ではむしろ、自由に考える力を⑤ソクバクしてしまっているように思える。

人が必死になって考えるのは、反抗するときだ。国語教科書のほとんどは、手取り足取り考えることを教えようとして、逆に、反抗しようとする力を封じているのである。内面は教えることなどできない。ただ、醸すことができるだけだ。

(三浦雅士『考える身体』による。一部改変。)

問1 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に改めよ。解答は記述式解答用紙。

- ① リョウブン
- ② エトク
- ③ ロウドク
- ④ メイワク
- ⑤ ソクバク

問2 空欄(a)～(d)にあてはまる語を、それぞれ次の①～⑤の中から一つずつ選べ。ただし、同じものを二回以上選んではならない。

解答番号は (a) ①、(b) ②、(c) ③、(d) ④。

- ① だが
- ② たとえば
- ③ つまり
- ④ あるいは
- ⑤ だから

問3 傍線部(ア)「こと言葉に関しては強調しない」の「こと」の意味として、最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は⑤。

- ① なまじ
- ② しこたま
- ③ すこぶる
- ④ もとい
- ⑤ とりわけ

問4 空欄 A に入る四字熟語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 胆大心小
- ② 針小棒大
- ③ 大同小異
- ④ 小利大損
- ⑤ 大器小用

問5 傍線部(イ)「教室という場所がまったく誤解されている」とあるが、筆者は教室についてどのような考えを持っているか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 7。

- ① 教室は晴れの場であり、主人公の考え方や生き方を公衆の面前で語ることができる場所である。
- ② 教室は公の空間であり、筆者の生き方について、生徒が正直に考えることができる場所である。
- ③ 教室は社会的な空間であり、本音が滲み出る近代の文学空間の対極に位置している場所である。
- ④ 教室は教科書に示された正しい考え方の道筋を教師が教え、生徒同士で議論させる場所である。
- ⑤ 教室は個人の勉強部屋とは違い、本音と建前が交錯する社会的な性質を持っている場所である。

問6 傍線部(ウ)「どうしようもないもどかしさを感じる」とあるが、その理由として最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 筆者の考え方を要約すること自体が非常に面倒な作業であるうえ、意味を見いだすことができないから。
- ② 教科書に掲載されている作家のことを特に尊敬していないにもかかわらず、読むことを強要されるから。
- ③ そもそも、教科書に採用されることを嫌がる作家の作品を、自分から積極的に読もうとは思わないから。
- ④ 教科書に掲載される文学作品は教育的な目的によって選ばれたものであるため、純粹に楽しめないから。
- ⑤ すぐれた文学は、筆者の考え方を要約しきることができないのに、要約することを無理強いされるから。

問7 次は筆者の国語教科書に対する考えをまとめたものである。本文全体の内容をふまえ、空欄 Ⅰ を20字以内、空欄 Ⅱ を50字以内で書け。解答は記述式解答用紙。

国語の教科書の目的は、教材の文章を通じて生徒に
Ⅰ (20字以内) ことであるが、実際はこの目的とは正反対の生徒
が生み出されている。なぜなら教科書は、
Ⅱ (50字以内) からである。

第2問 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。

太平洋戦争が一九四五年八月十五日に日本の敗戦で終わった。日本は、アメリカ軍を中心とする連合国軍に占領され、連合国最高司令官総司令部(GHQ)に統治された。食料や酒は戦前から続いていた配給制が戦後も続き、それらを自由に売り買いすることはできなかった。

終戦後二年目の八月十五日のことであるが、伊豆の伊東温泉に三浦按針祭というものが行われて、当日に限って伊東市は一切の禁令を解除し、旅館や飲食店はお酒をジャン／＼のませてもよいし、スシでもドンブリでも何を売ってもよろしい、という地区司令官の布告がでたという。

戦争以来伊東へ疎開している彫刻家のQから速達がきて、右のような次第で、当温泉は全市をあげて当日を手グスネひいて待ちかまえて、すでに今から活気横溢しているほどだから、(ア)当日の壮観が思いやられるではないか。ぜひ来遊したまえ、という招待であった。

終戦二年目の八月といえ、日本カイビヤク以来これほど意気消沈していたことは例がない。と云うのは、その年の七月に、料理飲食店禁止令というものがで、一切の飲みもの食べものの営業がバツタリと杜絶した。禁令というものは、かならず抜け道が現れて、裏口繁昌、表口よりもワリがよくて禁令大歓迎というのが乱世の常道だ。アル・カポネや蜂須賀小六大成功の巻となる。これが今日では常識であるが、はじめて禁令をくらった歴史的瞬間というものは、全然の初心者であるから、アレヨ、アレヨと云って途方にくれ、未来のアル・カポネたちも店をたたんで腕を組み天を仰いでいるばかり。真夏の太陽はいたずらにカンカンteriかがやき、津々浦々ゲキとして物音もない寂しい日本となってしまった。

この時に当って、たった一日でも禁令を解除するというから、きいただけで心ウキウキしてしまう。

私が大いなる感動をもって招待に応じたのは、云うまでもないところで、ところが私をむかえた友人は浮かぬ顔。

「アレはデマだね。話がうますぎると思ったよ。こんなことがあればいっと、みんな同じ夢を見ているんだらうな。誰か一人がヤケツパチに思いつきをやったのが、全市を(イ)風靡したものらしいよ」

温泉町で、酒ものませない、御飯もたべさせない、となると、万事温泉客に依存している町柄であるから、(ウ)全市死相を呈するのは仕方がない。

駅前にはアーチをたてて按針祭の景気を煽っているが、電車から吐きだされた旅行者らしきものは私ひとり、いくらか人の肩と肩がすれちがうのは道幅一間ほどの闇市だけで、大通りは、光と影をみだすものとは熱気のこもった微風だけである。常には賑いを独占している遊興街も軒なみに門戸をどぎし、従業員もとつくにオハライバコで、死の街であった。

「しかし、君の旅情を慰めるためには別アツライの席が設けてあるから、落胆しないでくれたまえ。どうやら、君の歩く足が、^(エ)とみに生気を失ったようだが」

と、彼は私を慰めて、

「せっかく意気こんで来てくれたのに、夢の一日は煙と消えて、こんなことを頼むのは恐縮だが、君にひとつ尽力してもらいたいことがある」

「なんだい」

「詩をつくってもらいたい」

私は返事の代りにふきだしてしまった。生れて以来、一度や二度は詩をつくったことがないでもないが、散文を書きなれた私には、圧縮された微妙な語感はずでに無縁で、^(オ)語にとらわれると、物自体を失う。物自体に即することが散文の本質で、語に焦点をおくことを本質的に嫌わねばならないのである。

私がふきだしたのを見て、友人は気分を損ねたようである。

「まア、いゝさ。今に、わかるだろうよ」

森の魔女が呪い^(ウ)をかけるような穏やかならぬ文句をのべたてて、

「君に見せたいものがある」

彼は私をアトリエへ案内した。アトリエのマンナカに、なんとも異様な大きな石が、ツヤツヤみがきこんである。

「君に見てもらいたいのは、この石像だが」

「石像？」

「ウン」

「この石でつくるのかい」

「これが完成した石像なんだよ」

と、彼は私をあわれみの目で見すくめた。

詩の仇^(カ)を石でうつとは不届き千万な。^(注1) シュルリアリズムは拙者若年のみぎりお家の芸、はチト大きいが、^(注2) アンドレ・ブルトン、^(注3) フィリップ・

スウポオ、^(注4) ルイ・アラゴン、^(注5) ポール・エリュアール e t c の翻訳があるときいたら、奇妙な石ぐらいで目はくらまされないと知るべきである。事、

石神（シヤグジとよむよ）道祖神に關しても、拙者年来のウンチクがあつて、^(注6) 帝釈様の御神体など、余アマネクこれを知る e t c の学がある。

「敗戦以来、^(注7)アヴン・ギャルドに御転向だね」

と、ひやかしてやったが、彼はムツとして、とりあわない。

「これは何物の石像です？」

「カンゾオ！」

「カンゾオ？」

「しかり！」

「ケスク・スラ・シニヒ？」（それは何を意味するや）

「スラ・シニヒ・モツ！」（それはモツを意味する）

「モツ？」

「モツ！ セタジール（スナワチ）レバー！」

「アッ。ヤキトリ！ 肝臓！」

「セッサ！」（しかり！）

シュルレアリズムのウンチクも及ばないのは仕方がない。探偵小説を書いたこともあるが、解剖を見学したこともなく、ハズカシナガラ、肝臓の形を知らない。しかし、直径一間もある石の肝臓をつくる男はどうかしている。

「肝臓はこんな形をしているもんかね」

「アイ・ドント・ノオ！」

「アレレ。コレ、肝臓デワ、アリマセンカ」

「余は胃や腸や心臓を見て、これを造った。余の見た書物に肝臓の絵がなかったのである」

「フウム^(カ) ききしにまさる天才であるよ。ヤキトリ屋の置物かな。看板にしては入口をふさいでしまうし、庭の石かな。しかし、ヤキトリ屋というものは小デジマリとしたもので、なんしろ目の前で焼いて食わせる店だから、庭はないはずだがな」

「シッ！」

^(キ)彼は私を制した。まさしく彼はどうかしている。^(ク)端坐して、と云いたところだが、椅子にかけているから、キッチンと両膝をそろえて、シンミリ

私を見つめたと思うと、うつむいて、ポタリと一としずく。驚いたの、なんの。

「わが友よ」

彼は涙をふりはらって、おごそかに石の肝臓を指した。

「これなる肝臓はわが畏友、わが師、医学士赤城風雨先生の記念碑である。われら同志よりつどい、先生の高德をケンシヨウしてそぞろ歩きの人々に楚々たる微風を薫ぜんため、これを目立たぬ街角へ放置せんとするものである。汝が詩を書かねばならぬのは、この肝臓の碑面であるよ」

(坂口安吾「肝臓先生」による。一部改変。)

(注) 1 シュルリアリズム——シュルレアリスム運動のこと。第一次世界大戦後にフランスで起こった芸術革新運動。非合理なものや意識下の世界を追求し、詩や絵画などにそれを表した。

2 アンドレ・ブルトン——一八九六〜一九六六。フランスの詩人。一九二四年「シュルレアリスム宣言」を書き、シュルリアリズム運動を始めた。

3 フィリップ・スウポオ——一八九七〜一九九〇。フランスの詩人、小説家。ブルトンと自動記述の実験を行い、シュルレアリスムの作品を発表した。

4 ルイ・アラゴン——一八九七〜一九八二。フランスの詩人、小説家、文芸評論家。文芸雑誌『シュルレアリスム革命』を主宰し、シュルレアリスム運動を牽引した。

5 ポール・エリュアール——一八九五〜一九五二。フランスの詩人。ブルトン、スウポオ、アラゴンらと共にシュルレアリスム運動を牽引した。

6 帝釈天——仏法の守護神の一つ。

7 アヴン・ギャルド——アバンギャルドのこと。表現・手法・芸術観の急激な変革を求める芸術運動。前衛芸術。

問1 傍線部(ア)「当日の壮観」とあるが、具体的にはどんなことを指しているのか。次の①～⑤のうちから最も適当なものを一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 一切の禁令が解除された当日、伊東市の市民が先を争って、お酒や食べ物を買いかさっている様子。
- ② 終戦記念日の当日、伊東市の市民が皆、戦争が終わった喜びを嘯^かみしめ、感謝とともに食事している様子。
- ③ 地区司令官からの布告が出た当日、ようやく商売ができる店主が喜び勇んで商品を売っている様子。
- ④ 彫刻家Qのところを訪ねる当日、二人で久しぶりに酒を酌み交わしながら再会の喜びに浸っている様子。
- ⑤ 三浦按針祭り当日、伊東市中が賑わいに満ち溢れ、多くの人が楽しく飲食をして盛り上がっている様子。

問2 傍線部(イ)「風靡した」、(エ)「とみに」、(ク)「端座して」の本文中の意味として最も適当なものを、それぞれ次の①～⑤のうちから一つずつ選べ。

解答番号はイ 10、エ 11、ク 12。

(イ) 風靡した

- ① 混乱させた
- ② 奮い立たせた
- ③ 信じさせた
- ④ 沈黙させた
- ⑤ 驚かせた

(エ) とみに

- ① 知らぬ間に
- ② 急に
- ③ 微妙に
- ④ 悲し気に
- ⑤ 確実に

(ク) 端座して

- ① きちんと正座して
- ② どっしりと構えて
- ③ 一人だけ座って
- ④ 平身低頭して
- ⑤ 真摯に向き合って

問3 傍線部(ウ)「全市死相を呈する」とはどういう様子を表したのか。35字以内で書け。解答は記述式解答用紙。

問4 傍線部(オ)「語にとらわれると、物自体を失う」とはどういうことか。次の①～⑤のうちから最も適当なものを、一つ選べ。解答番号は13。

- ① 言葉本来の正確な意味にこだわりすぎると、表現しようとするものの持っている多様なイメージを示すことが難しくなるということ。
- ② 詩独特の形式や技法を意識しすぎると、ともすれば難解な表現になりがちで、文学に関心の無い人は離れて行ってしまうということ。
- ③ 一つ一つの言葉を吟味しすぎると、全体としてのまとまりに欠けた、断片の寄せ集めのような散漫な表現にしかならないということ。
- ④ 詩の独特な言葉遣いに慣れてしまうと、現実感覚が失われてしまい、詩以外の文章を書くことが段々難しくなってしまうということ。
- ⑤ 言葉の微妙な語感や表現方法にこだわりすぎると、言葉が現実のものごとから離れて、それだけで独り歩きをしてしまうということ。

問5 傍線部(カ)「ききしにまさる天才であるよ」とあるが、ここに込められた意図として、最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は14。

- ① 皮肉
- ② 謝罪
- ③ 畏敬
- ④ 憎悪
- ⑤ 追従

問6 傍線部(キ)「彼は私を制した」とあるが、その理由について述べた次の文の空欄A、Bに当てはまる語句を、それぞれの空欄の指示に従って書け。解答は記述式解答用紙。

この像は、尊敬する友であり、師でもあった医学士赤城風雨先生が高い人徳を備えた方であったことを、控えめながら

A (15字以内)

ためのものであり、それによって人々の心に

B (20字以内)

真面目な目的のもので

あるから。

第3問、第4問は受験する学科・専攻によって解答する設問が異なりますので、注意してください。

【大学】情報工学科

経済学科

経営学科

文学科（英米文学専攻、心理学専攻）

教育学科

芸術学科

栄養学科

スポーツ科学科

【短大】現代教養学科

食物栄養学科

幼児教育学科

上記学科・専攻の受験者は、第3問を解答しなさい。

（13 ページ～17 ページ）

【大学】文学科（日本文学専攻、歴史学・考古学専攻）の受験者は、第4問【古文】を解答しなさい。

（18 ページ～21 ページ）

第3問 次の【文章】と【資料】を読んで、後の問い(問1～2)に答えよ。

【文章】

文法を、法律の条文のように、ことばで示すことができる「規則」にする単純化はわかりやすいが、ときに思わぬ危険を招くことがある。例えば、「全然大丈夫です」のように肯定文の強調として「全然」を用いる言い方をする人がいると、「最近の若者は、全然を肯定で使っている。全然は、全然くしない」と否定文で使うのが正しい」と言つて、顔をしかめる向きがある。ここには新しいことばづかいへの嫌悪があるのは事実だとしても、いくつかの誤解が含まれている。

まず「全然」を肯定文で使う例は江戸時代から見られ、近代になってからもそれほど珍しくはない。夏目漱石の『坊っちゃん』では、主人公が「一体生徒が全然悪いです」という場面が出てくる。「全然」は、江戸時代に口語体中国語で書かれた(注)白話小説の影響で使われ始めたというが、戦前の小説などでは「すっかり」「まったく」というふりがなをつけて使うことも多かった。永井荷風の『つゆのあとさき』には、「これまで考えていた女性観の全然誤つていた事を知つて」という表現が出てくる。

実態としては、肯定文でも使われているのに、否定と呼応させて使うという「迷信」が「全然」に付与されたのはなぜだろうか。明治後半から終戦くらいまで、おおむね二十世紀前半は、文法教育が確立していく時代でもあった。例えば、英文法なら、「*at all*」は否定文で用いて否定を強める、「*Do it*」なら「*gar*」は *nicht* の直前に置き、否定を強める」のように、否定と呼応規則として教授することも多かった。日本語でも、同じような文法規則があると想定されるようになり、*at all* や *gar* の訳語に使うことも多かった「全然」に否定呼応規則のイメージが染み込んでいったと考えられる。

実は、*at all* や *gar* も否定でのみ使うわけではないのだが、規則は単純なほうが教えやすく、習得しやすい。強調の副詞は他にもたくさんあるから、「全然」が否定文でしか使えなくなっても、現実には困ることはまずないわけである。ここで興味深いのは、現実のことばの使用から抽出するはずの文法規則が、いつのまにか主客転倒して、文法規則に合うように現実のことばの使用が制限されるようになってしまったことである。

なお、最近の国語辞典の多くは、「全然」は否定文でのみ使うという誤解を解くための補足を載せている。国語辞典など新しくなっても大差がないという人がいるが、ことばの変化に合わせた更新を除いても、新しい知識や知見、新しい説明などが加わり、辞書は新しいほどよくなつていくのである。面白いのは、最近の「全然」が否定の想定を打ち消す配慮の機能を持つている点である。若者から広まる新しいことばは、知らないことや誤解から生じる場合もあるが、むしろ新しい配慮のかたちの現れであることも少なくない。

例えば、「全然おいしい」などは、最初から誰もがおいしいとわかっている場合には使わないのが普通である。「新しくできた〜ってレストランがおいしいって評判だから、早速食べに行っただんですが、やっぱり、すごくおいしくて感動してしまいましたよ」と言うときに、「すごく」の代わりに「全然」を使う人はまずいないだろう。一方で、「私がつくったんですが、おいしくないでしょ?」と言いながらすすめられたものを味見しているなら、「全然おいしいですよ」はうまく合致する。誰かが「おいしくない」と思っている状況で、それを打ち消して「全然おいしい」と相手に配慮するのが、さきほど述べた「否定の想定を打ち消す配慮」にあたる。

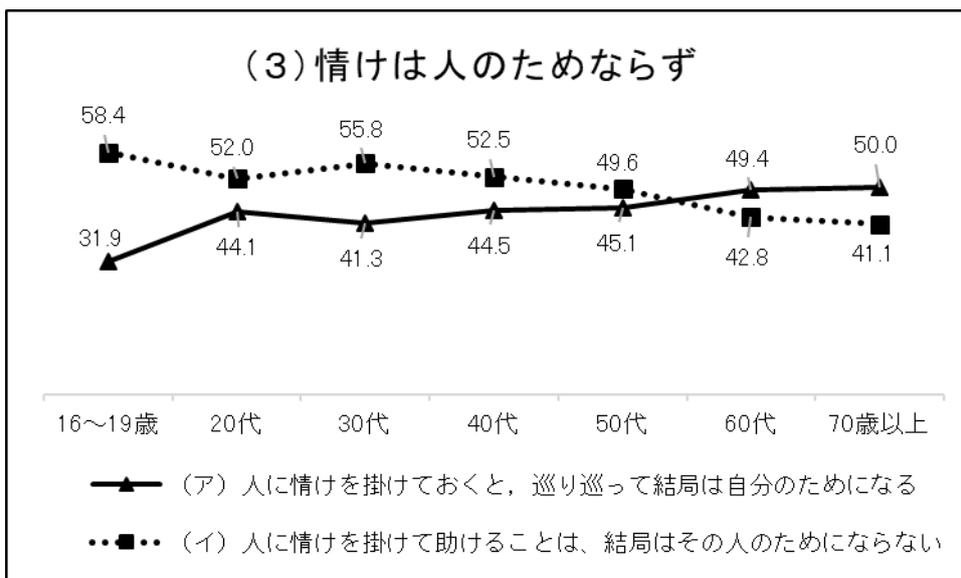
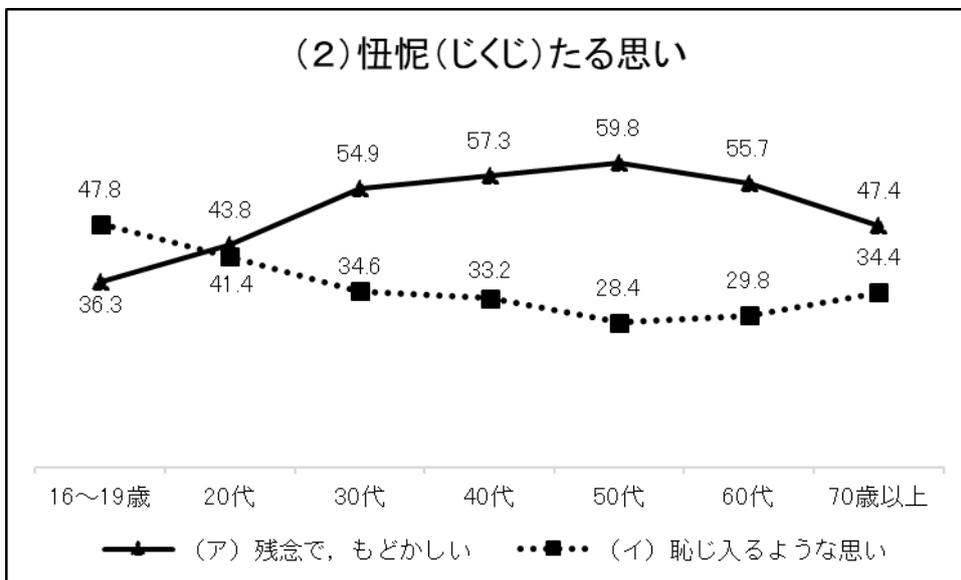
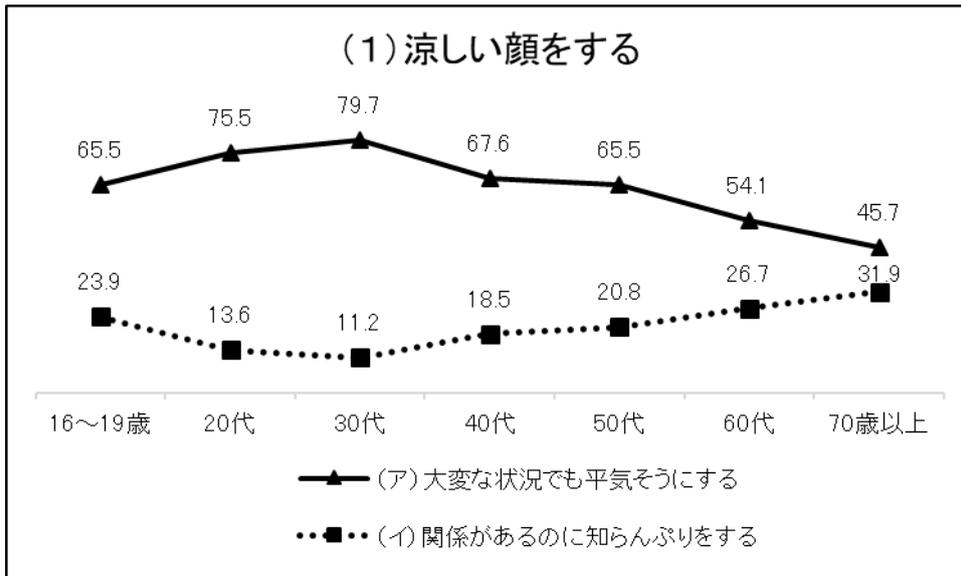
こういう使い方が、ことばの微妙な解釈への感受性が強い若年層から始まることはあるから、よわい 年齢と経験を重ねた気になって年長者が深く考えずに若者に小言を言うのは考え直したほうがいいと、私も日々自戒しているところである。コンビニで飲み物を買ったときに「ストローをおつけしますか」と聞かれ、「要りません」ではなく「全然大丈夫です」と答えるのは、「ストローがないと困るのではないかとという配慮に対して、なくても困らないと否定の想定を打ち消しながら、問題がないことを配慮しつつ言う」ことなのだという(呉泰均氏の研究による)。年齢を重ねて無粋な中高年になって来ると、そんなに配慮し合う必要があるのかと思わないでもないが、配慮そのものは美德だから、少なくとも小言は控えなければなるまい。

(加藤重広『日本人も悩む日本語』による。一部改変。)

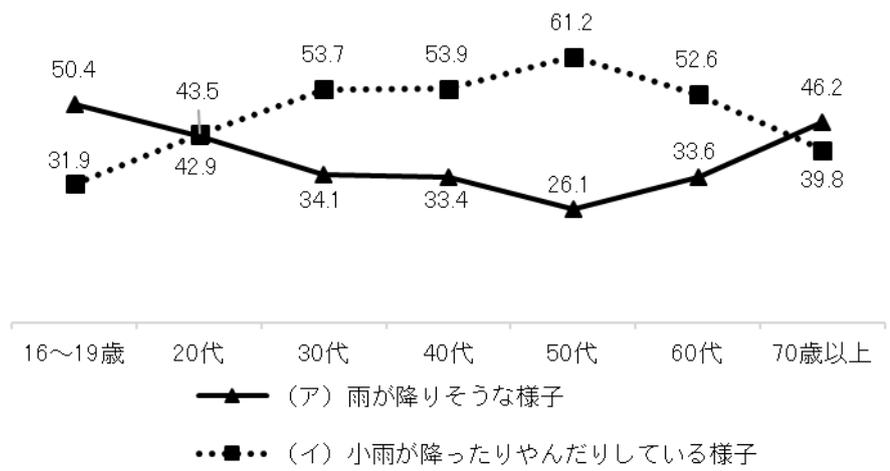
(注) 白話小説——『水滸伝』すいこでんなどのように、中国において話し言葉に近い口語体で書かれた文学作品のこと。

【資料】（文化庁「令和4年度『国語に関する世論調査』」による。一部改変。）

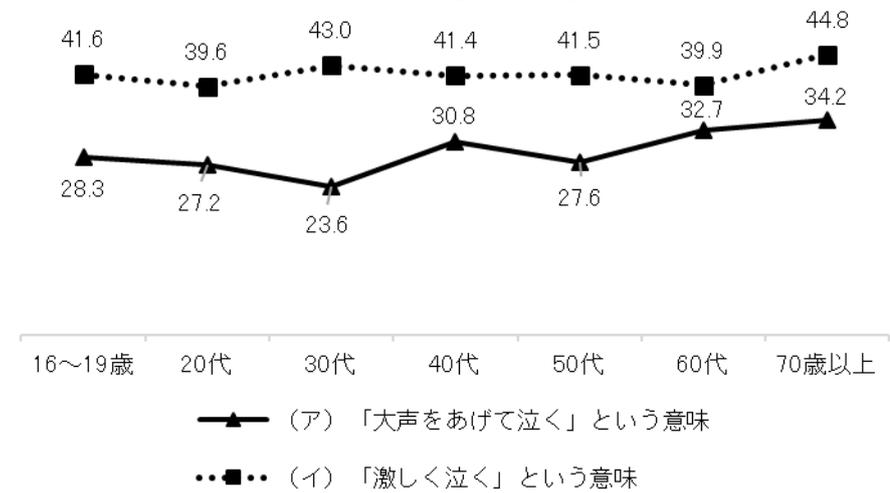
文化庁は、国語に関する世論調査を行い、「涼しい顔をする」「忸怩たる思い」「情けは人のためならず」「雨模様」「号泣する」の五つの言葉について、それぞれ「辞書等で本来の意味とされてきたもの」、「そうでないもの」の二つの選択肢を用意し、どちらの意味だと思うかを質問した。その回答結果を年齢別にまとめて、次のグラフに示した。（数値は、％）



(4) 雨模様



(5) 号泣する



問1 次は【文章】の内容をまとめたものである。文中の空欄 A E に入れるのに最も適当な語句を、本文中から抜き出して書け。

解答は 記述式解答用紙。

ことばの実際のつかわれ方を見ずに A された B で正しさを判断することは、 B に合わせて現実のことばの使用が C されるといった D や危険を招く。例えば、最近の「全然」には、相手をもつ否定の想定を打ち消し、問題がないことを相手に配慮して伝える機能を持っている。こうしたことばの新しい用法が、ことばの微妙な解釈への E が強い若年層から生まれることもある。

問2 【資料】について、16歳から19歳の年代が、他のどの年代よりも「辞書等で本来の意味とされてきたもの」を使っている割合が高い言葉を示すグラフはどれか。次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① (1)と(3)
- ② (2)と(4)
- ③ (3)と(2)
- ④ (4)と(3)
- ⑤ (5)と(4)

第4問【古文】 次の文章は『落窪物語』の一節で、女君とその夫（大将）が、女君の父（中納言）の七十歳を祝った後の場面である。これを読んで後の問い（問1～6）に答えよ。

かくて、(a) やうやう中納言重く悩みたまへば、大将殿いとほしく思し嘆きて、修法など(b) あまたせさせたまへば、中納言、「何かは。今は思ふことも侍らねば、命惜しくもはべらず。わづらはしく何かは祈りせさせたまふ」と申したまふ。弱るやうになりたまへば、「(c) なほ死ぬべきなめり。今しばし生きてあらばやと思ふは、我年ごろ沈みて、昨日今日の若人ども多く越えられて、なりおとりつるになむ、(イ) 恥に思ひける。わが君のかばかりかへりみたまふ御世に、命だにあらば、なりぬと思ひぬるに、またかく死ぬれば、わが身の大納言になるまじき報にてこそありけれど、これのみぞ飽かずおぼゆること。さても、老いはて、死しにのはての(c) 面立たしさは、おのれにまさる人よにあらじ」とのたまふを、大将聞きたまひて、あはれにおぼゆること限りなし。女君、「いかで大納言をがな。一人なしたてまつりて、飽かぬことなしと思はせてまつらむ」とのたまふを聞きたまひて、げにさせばやと思せど、(注1) 数よりほかの大納言になさむことは難し。人のはた取るべきにあらず、わがを譲らむの御心つきて、父大臣の御もとにまうでたまひて、「かくなむ思ひたまふるを。」(注2) 幼き者ども多くはべれど、それが徳を見すべく、行く末あるべきことにもあらぬ代りには、(ウ) このことをなむしはべらむと思ひはべる。御けしきよろしう定めさせたまへ」と申させたまふ。「何かはさ思はむを、早うさるべきやうに奏を奉らせよ。大納言はなくてもあしくもあらじ、わが心なる世なれば」と思してのたまへば、(エ) 限りなく喜びたまひて、申して奏奉らせたまひて、中納言、大納言になりたまふ宣旨下したまひつ。これを聞きて、大納言わづらふ心地に泣く泣く喜びたまふさま、親にかく喜ばれたまふに、(オ) 功德ならむと見ゆ。

(注) 1 数よりほかの大納言——大納言の定員(二名)を越えて任じることを指す。

2 幼き者ども——女君と大将のあいだの子を指す。

問1 二重傍線部 (a) () (c) の文中の意味として最も適当なものを、それぞれ次の①～⑤のうちから一つ選べ。

解答番号は a 15、 b 16、 c 17。

(a) 「やうやう」

- ① 急に
- ② やっと
- ③ 非常に
- ④ かろうじて
- ⑤ 徐々に

(b) 「あまた」

- ① たくさん
- ② ていねいに
- ③ おもむろに
- ④ おごそかに
- ⑤ 豪華に

(c) 「面立たしさ」

- ① 怒り
- ② 無念
- ③ 容色
- ④ 苦勞
- ⑤ 名譽

問2 傍線部 (ア) 「なほ死ぬべきなめり」の文法的な説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 「死ぬ」はナ行変格活用動詞の終止形である。
- ② 「べき」は推量の助動詞の連体形である。
- ③ 「なめり」の「な」は完了の助動詞の未然形である。
- ④ 「なめり」の「めり」は推定の助動詞の終止形である。
- ⑤ 「なほ死ぬべきなめり」は、助詞を含んでいない。

問3 傍線部(イ)「恥に思ひける」の理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

19

- ① 女君の将来を大将に託さなければならぬから。
- ② 女君が中納言より若人たちを心配しているから。
- ③ 中納言の悩みを女君や大将が解決できないから。
- ④ 中納言が数年ほど出世から遠ざかっているから。
- ⑤ 中納言の将来を女君に心配させてしまったから。

問4 傍線部(ウ)「このことをなむしはべらむと思ひはべる」の解釈として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

20

- ① 中納言を私のかわりに大納言にしようと思います。
- ② 中納言を父大臣のかわりに大納言にしようと思います。
- ③ 私が中納言のかわりに大納言になろうと思います。
- ④ 女君を中納言のかわりに大納言にしようと思います。
- ⑤ 幼き子どもを中納言のかわりに大納言にしようと思います。

問5 傍線部(エ)、(オ)の主語として最も適當なものを、それぞれ次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号はエ∥ 21、オ∥ 22。

(エ)「限りなく喜びたまひて」

① 女君 ② 大将 ③ 中納言 ④ 父大臣 ⑤ 上のいづれでもない

(オ)「功德ならむと見ゆ」

① 女君 ② 大将 ③ 父大臣 ④ 幼き者ども ⑤ 上のいづれでもない

問6 『落窪物語』と同時期に成立した作品として最も適當なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 23。

① 『十六夜日記』 ② 『蜻蛉日記』 ③ 『折たく柴の記』 ④ 『野ざらし紀行』 ⑤ 『明月記』

**2023(令和6)年度 金沢学院大学・金沢学院短期大学
一般選抜 I 期 (3日目/2024年2月2日実施)
解答例【マーク式】**

国語 【国語総合】			
解答番号	正解	配点	
第1問	1	②	2
	2	③	2
	3	④	2
	4	①	2
	5	⑤	3
	6	③	3
	7	③	5
	8	⑤	5
第2問	9	⑤	2
	10	③	2
	11	②	2
	12	①	2
	13	⑤	2
	14	①	2
第3問	15	②	5

マーク	41
記述	59
計	100

国語 【国語総合+古文】			
解答番号	正解	配点	
第1問	1	②	2
	2	③	2
	3	④	2
	4	①	2
	5	⑤	3
	6	③	3
	7	③	5
	8	⑤	5
第2問	9	⑤	2
	10	③	2
	11	②	2
	12	①	2
	13	⑤	2
	14	①	2
第4問	15	⑤	2
	16	①	2
	17	⑤	2
	18	③	2
	19	④	3
	20	①	3
	21	②	2
	22	⑤	2
	23	②	2

マーク	56
記述	44
計	100

記述式解答用紙 「国語」

解答例

志望学科	受験番号
学科	氏名
専攻	専攻

※専攻は「文学科」「教育学科」受験の場合に記入してください。

第1問

④	①
迷惑	領分
⑤	②
束縛	会得
配点各	③
2	朗読

問7

二		一	
しまつてい	逆に生徒が必	手取り足取り	独創的に考
る	死に考える	考えること	える力や想
	に考えること	よ	像力を身
	うと	うと	に
	する	する	つけ
	力を封じ	力を封じ	させる
	て	て	る
配点	10	配点	6

第2問

う	町
に静まり返	の活気がな
っ	く
てい	なり
る	、市内がど
	こ
	も
	死んだよ
配点	7

問6

B	A
細やか	世間の人々
で美しい	に広く知
感動をも	つても
たらそう	う
と	
する	
配点	5
配点	6

第3問

問1	A	単純化
D	E	誤解
感受性	B	文法
配点各	C	制限
3		